柳町　思案橋荷揚げ場跡発掘調査現地説明会

1　発掘調査概要

【調査地】佐賀市柳町 199

【発見された遺構】

〇江戸時代から明治時代に築かれた石垣護岸、雁木、側溝、建物の礎石など

※雁木（がんぎ）とは船着き場で船荷を積み下ろしするための階段

【調査の成果】

〇現在の護岸は埋立られたもので、元々は現位置から西側約４メートル程で石垣が築かれていた。

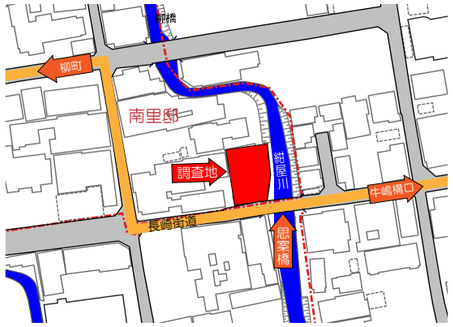
〇石垣は、江戸時代中頃～後期と幕末～明治期に築かれた２時期存在する。

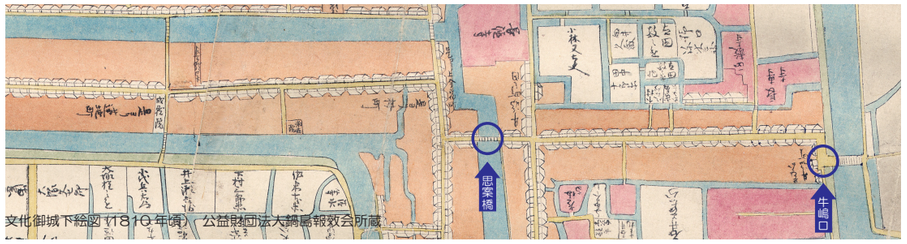
〇雁木は、主に長さ 180 センチ、幅 30 センチ、厚さ 10 センチ程の竿石が 12 段据えられ、雁木の南側には幅 0.8 メートルの側溝が造られている。

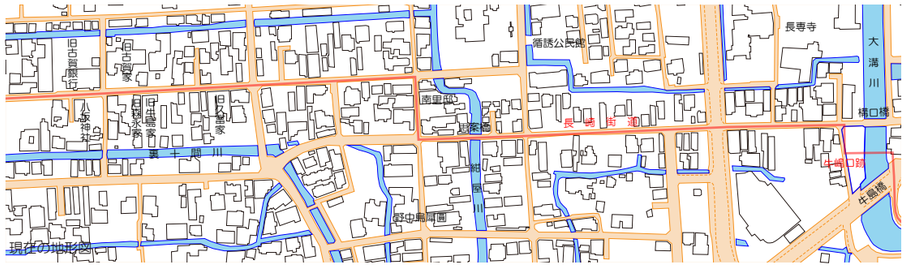
〇雁木の最上段には扉（裏木戸）の痕跡があることから、土蔵などの建物とつながっていたと考えられる。

〇佐賀城下に残る「棚路」のような水路の水洗い場の事例とは構造・規模なども相当に異なることから「船着き場・荷揚げ場」としての要素が強い。

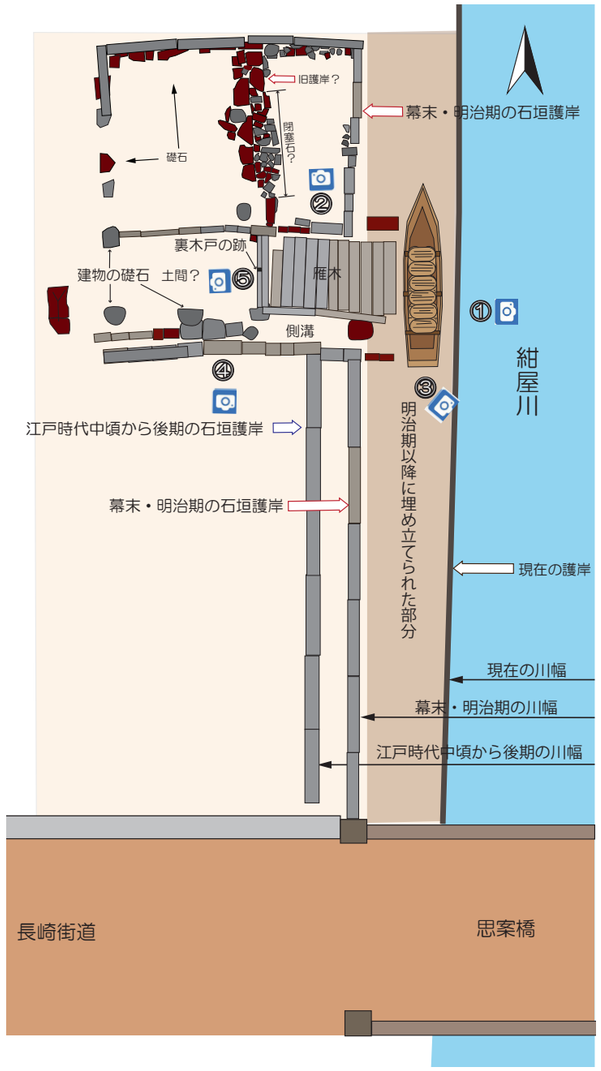
2　調査位置

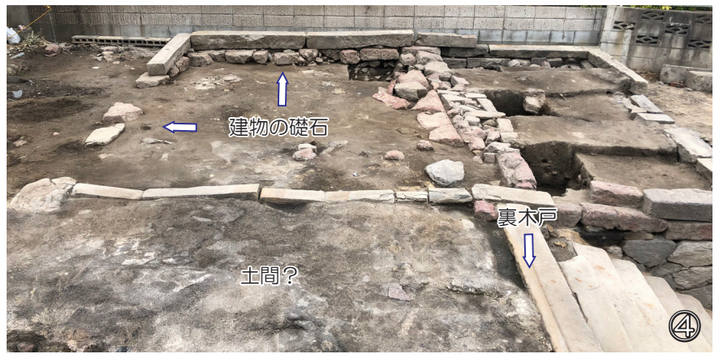






3　遺構検出状況略図（荷揚げ場イメージ図）





4　遺構発見の意義

〇佐賀城下で江戸時代から続いた荷揚げ場の発見は初めてで、紺屋川を介して舟で物資の運搬が行われていた往時の希少な名残である。また、石垣の護岸と雁木が一体となって状態よく残っており、石段の据え方などの構築技術を知る上でも貴重である。

〇長崎街道と川が交差する特徴的な地区で、護岸の変遷による川幅や土地利用の変化、往時の景色の移り変わりをたどることができる興味深い資料である。